

ごあいさつ



日本赤十字社医学会
理事長 富田 博樹
(日本赤十字社医療事業推進本部長)

本医学会は昭和 39 年に発足してから今年で 52 回目の総会を迎えることができました。これもひとえに会員の皆様方のご支援ご協力のおかげであり、心から御礼申し上げます。

今年は、東日本大震災の傷がまだ癒えていないにも拘らず、長く地震を経験していなかった熊本を中心とした地域において 4 月 16 日に震度 7、マグニチュード 7.3 (本震) の地震が発生しました。

今回の地震は、震源が熊本赤十字病院からわずか 2～3 km の内陸部で発生した大規模地震であり、病院だけでなく職員の自宅の 6 割が被災損傷し、多くの職員が避難所生活や車中泊を余儀なくされる中、発災直後から被災地に最も近い基幹災害拠点病院としての使命を懸命に果たしておられました。

このような状況の中、通常の救護班の他、全国の赤十字病院から、医師、看護師、事務の職種において熊本赤十字病院への支援として、4 月 21 日から 1 か月半にわたり延 285 名もの職員を派遣いただきました。

このことは、一二三院長の「本当に赤十字病院グループの強い、そしてあたたかい絆を実感しております。」というお言葉でわかるように、日本最大の病院グループとしてのお互いの助け合いの心とその実践力を明らかに示したものと、誇らしく思っております。

また、本年度は平成 26 年度より検討を重ねて参りました医療事業推進本部を発足させることができました。この本部制は各赤十字病院の自主性を尊重しつつ、グループとしての経営戦略を策定し、赤十字病院グループの総合力を生かし、病院経営支援力の強化、病院経営に優れた人材の育成、シンクタンク機能の強化などの取り組みを行ってまいります。本部発足時には多くの赤十字病院から本部機能の強化のために専門性が高い職員を派遣いただいておりますので、全病院から本部制になってよかったと言っただけのよう全力を尽くしてまいりたいと思います。

本学会は、会則にも定められているように、日本赤十字社に勤務するすべての職員の医療及び赤十字事業に関する知識と技術の向上を目的としており、医師、看護師、事務職員、血液センター職員等幅広い職種の方々が様々な分野の演題を発表する予定で、その数は 861 に上ると聞いております。このことは、本医学会に対する皆様の高い参加意識が覗けるとともに、今後の赤十字グループの益々の発展に繋がるものと期待しております。

本年度の総会では「医療の国際化～赤十字から発する患者安全～」というメインテーマが掲げられております。

まず近衛社長に特別講話「赤十字から見た人道の世界地図」をお願いすることができました。近衛社長は国際赤十字・赤新月社連盟会長を2期目7年務めておられ、日赤医学会総会で講演されるのは、2002年横浜で開催された第38回総会において、副社長として「救援活動における我が赤十字の役割」の講演をされて以来14年ぶりです。赤十字人として大切な核心的なお話を伺うことができる絶好の機会となりました。その他、東京理科大学特任副学長向井千秋氏、日光東照宮宮司稲葉久雄氏による特別講演、JCI幹部によるセッション、「iPS細胞の臨床応用の実際」と題したシンポジウム等、我が国の伝統から最新の宇宙・医学の知見まで、幅広く充実した内容のプログラムとなっております。また、病院の壁を越えた専門職同士のつながりも醸成されてきており、そのグループにおける活動の発表・討論の機会も小松本総会会長のご厚意で実現しています。

今回の総会を開催していただく足利赤十字病院は、昭和24年7月の開設以来、救急医療、災害医療、周産期医療をはじめとした診療体制等を充実させることにより両毛地域の中核病院として成長してこられました。平成23年7月には全室個室による快適な療養環境や免震構造を中心とした万全の災害対策を備えた新病院が竣工し、全国の病院から参考にされる病院となり、平成27年2月には国内では数施設に留まっている医療施設の国際的な認証機関JCIからの認証を取得されました。また、本年4月には、オランダで開催された「第24回IFHE国際病院設備学会」において「IFHE国際医療福祉建築賞2016」の最優秀賞を受賞されるという快挙も成し遂げておられます。これからも理想の病院を目指し、地域の方々から信頼される病院であり続けることを期待いたします。

最後になりますが、今回の総会の開催にあたり、総会会長である足利赤十字病院の小松本悟院長をはじめ、関係者の皆様のご尽力に深く感謝申し上げます。会員の皆様には、今後とも本学会、そして赤十字グループのさらなる発展のため、一層のご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。